

原子力問題「自分ごと」に

住民主催で在り方議論

松江で会議



選挙人名簿から無作為抽出された松江市民が、身近な問題として原発の在り方を考える「自分ごと化会議 in 松江」が11日、島根大学(松江市西川津町)で始まった。計4回の会議を通して議論を重ね、関係先への提案につなげる。初回は市民と学生の計18人が参加し、有識者や島根原発2、3号機(同市鹿島町片匂)の稼働を目指す中国電力、

反原発団体の幹部の主張を聞いて知見を深めた。自分ごと化会議は、全国で唯一、県庁所在地に原発を抱える松江市民に原発への理解を深めてもらうとうと、山陰両県内の住民有志らでつくる実行委員会が主催。「事業仕分け」など無作為抽出で集まった住民が地域課題を議論する取り組みは他にもあるが、自治体主導ではなく、住民団体の単独開催は全国初という。

政策ビジョン研究センターの谷口武俊教授の基調講演



自分ごと化会議で発言する会議メンバー(松江市西川津町、島根大学)

に続き、意見が異なる4人の発言を聴講した。このうち、中電島根原子力本部の長谷川千晃副本部長は、化石燃料由来の発電に比べて原発は供給、単価面で優位性があると訴えつつ「原子力だけでなく、再生可能エネルギー、石炭、ガスと組み合わせた電力供給が望ましい」と説いた。

一方、さよなら島根原発ネットワークの土光均共同代表は「原発は二酸化炭素(CO₂)を出さないが、放射性物質を出す。それが地球に優しいのか、疑問だ」と問題提起した。

会議メンバーからは「原発だけでなく、エネルギーとどう向き合い、どんな社会で生きていくべきかを考えたい」などと今後の議論に意欲的な声が出た。

主催者によると、無作為

抽出で案内した市民2176人中、20〜70代の21人と、島根大生5人が参加意思を示している。会議は来年2月まで毎月開き、課題や改善策がまとまれば自治体や中電などに要望する。次回は12月9日に松江市市民活動センターで開く。

(松本直也)